グリルパルツァとカルデロン*

—グリルパルツァ死後百年祭記念講演の為に—

青　木　一　行

外国語教室

（1972年9月11日受理）

Grillparzer und Calderon

—Ein Vortrag. gehalten am 22. Januar 1972 in Osaka, zum 100sten Todestag Grillparzers—

Kazuyuki Aoki

Department of Foreign Languages

(Received Sep. 11. 1972)

Ich habe zum Gedenkfeier Grillparzers zwei Fragmente der deutschen Übersetzung der comedia vom spanischen Dichters Calderon "La vida es sueño" zum Thema meines Vortrags auserwählt, weil dieses Drama, wahrscheinlich das größte Werk Calderons, dem jungen Grillparzer eine auffallende Bedeutung hatte. Grillparzer hat im Jahre 1813 die erste Niederschrift geschrieben und hat im Jahre 1816 diese erste ganz ausgearbeitet. Durch deren Bearbeitung ist sein erstes Fragment ganz lebhaft geworden. Grillparzer zeigte dabei schon für seine Jugend eine große dichterische Fähigkeit auf. Er hat das nicht so leichte spanische Text ins gute Deutsch übersetzt. Wann und in welchem Zeitalter seines Lebens Grillparzer das Studium der spanischen Sprache begonnen hatte, kann man nur mutmaßen. R. Backmann sagt, daß der Dichter sich tief in Calderon versenkte, etwa von 1812 ab auf ein ganz Jahrzehnt. Aber der Dichter hat in sein Tagebuch am 14. August 1810, eingeschrieben, wie folgend; "Hoy me rendiò mi Tio José S. mi B.d.C." Dies wäre die älteste Eintragung Grillparzers in sein Tagebuch mit der spanischen Sprache. Wenigstens 3 Jahre lang sollte er die spanische Sprache studiert haben. Damals in Deutschland hatte man sich viel interessiert für die spanische Dichtung, dafür die Romantiker einen Anlaß gegeben hatten. Besonders W. und F. Schlegel hatten durch ihre Vorlesungen und Aufsätze die Ehrfurcht an Calderon offenbart. Zweifellos ist Grillparzer auch durch sie stark beeinflußt worden.

Ich habe in diesem Vortrag das Schema Calderon=Schiller, und Lope de Vega=Goethe etwas ausführlich erörtert, denn in diesem Punkt, glaube ich, liege das Geheimnis, durch dessen Kraft Grillparzer damals unwiderstehlich zur Dichtung Calderons hingewiesen war.

---

* この小文は1972年1月22日，大阪において発表されたものの原稿である。グリルパルツァは1872年1月21日に死去したが，その百年記念の集いはその翌日が阪神地区の独文学会の研究発表会に当っていた為，特に日本グリルパルツァ協会員として参加させていただいた。内容に関しては後で読み返して自身意に満たぬことばかりであるが，全世界でグリルパルツァに関心を持つ人々が，多くの会を持った一環として行なはれたその会合において，小さな研究発表をさせていただいたことを光栄に思い，その時の原稿を，そのまま訂正せずに印刷させることにした。

1月21日はグリルパルツァのなくなった日でありまして，昨日がその百回目の記念日に当って居りました。

1872年の1月21日，百年前のこの日は丁度日曜日でありましたが，その日の午後2時半，ひっそりと静まった冬のウィーンの南，王宮近くの Spiegelgasse の彼の部屋で，椅子にもたれたまま，グリルパルツァは寝入るように没くなりました。満81才と6日でした。

彼が没くなったその前年の1月15日は，彼の80回目の誕生日でしたが，彼に祝福を贈ろうとして訪れる人は引きも切らず，Spiegelgasse の彼の住居には群集が詰めかけて，雑踏を極めたと言われて居ります。すでにその前日から，彼の許には≫造形美術アカデミー≪の院長が訪れて来たり，スコットランド高等学校，議会の委員会などから代表が派遣されて来たり，オーストリー皇太子フランツ・カルルが侍従を遣わして祝辞を述べたり，グラーツ及びインスブルック両大学の哲学科が彼に名誉博士の称号を贈ったり，プラーク大学のドイツ人教授団がホラティウスの文体を摸したラテン語の Ode を献じて祝賀の言葉としたりいたしました。又インスブルック，イーグラウ，ツナィム，ボーツェンの各都市は詩人に名誉市民の称号を贈りました。1月15日の誕生日当日には，午前9時すぎに国会の副議長が現われ，数分たらずの後には皇帝が Franz Josef 大十字勲章を侍従に持たせて派遣され，同時に内帑金から3000グルデンの年金を贈り，更に親書をグリルパルツァに下されました。その親書には≫祖国オーストリーならびに諸侯に対して忠誠なる老人・真実の愛国者なる尊敬すべき詩人に≪と書かれてあったと申します。さらにアルブレヒト大公，コーブルク王子からも使者が立てられ，また午前10時きっかりには帝室学術アカデミーの代表団が祝賀の為に姿をあらわし，更に市長に率いられた市会議員達が訪れてきて，彼にウィーン市の名誉記を贈りました。そのあと，ブルク劇場の市配人が俳優達を引きつれて彼を訪問しましたし，正午頃になるとウィーン市の婦人会役員がイードゥナ・ラウベという婦人に率いられてやって来て，グリルパルツァに2万グルデンを贈り，彼の名誉を顕彰しました。

80才のグリルパルツァは更にその上に数えきれぬ程の名誉に包まれたのでしたが，彼はこの時，≫今日という日は私にとってレーテ河の流れを飲んだようなものであった。働らき盛りの頃の私の身に起った悪い思い出も，80才の今，忘れることにしよう≪と申したといわれて居ります。

グリルパルツァが亨けたこれらの名誉の数々にもまさって，彼の死を悼む声も又高いものでしたが，ブルク劇場の支配人でグリルパルツァの作品の最初の編集者になった Heinrich Laube が1月24日のグリルパルツァの埋葬についてベルリーンの≫Die Gegenwart≪という雑誌に1872年2月3日掲載した文章がありますので，それから若干引いてみようと思います。

「Währing の墓地まで，徒歩で1時間あまり，沿道の左右を十重・二十重に人々がうづめつくし，柩の通過につれて彼らはその帽子を脱いだ。冬の泥濘んだ道を，葬列に従う人は数十万人にも及ぶかと思うばかりであった。今ここに埋葬される者が傑出した男であったということ，この男こそ崇高なるものの代表であったということ，そして何よりも彼が，自分達の感ずる所を同じ感情で代弁してくれていたのだということ，そして彼こそ自分達の詩人であるのだということを，最多数の庶民はしみじみ悟っていたのである。」

本日，グリルパルツァを記念する祭りの日を迎へて，百年前に彼を失ったオーストリー国民の深い哀悼の気持と，彼の埋葬の盛儀とを私は回顧せざるを得ません。

グリルパルツァがヴィーンの生んだ恐らくは最大の詩人であったことは疑えませんが，Paul Fechter も云うように，「彼にとってはヴィーンは単にオーストリーの首都である丈ではなく，その版図に陽の沈むことのなかったドイツ皇帝としてのハプスブルグ家の町でもあった」のでありまして，殊の外ヴィーン的であったグリルパルツァは，いわば狭い局地的な伝統にその文学の多くを負いながら，しかも同時にヴィーンをも，又オーストリーをも広く超え出ていたのでありました。

彼の本格的な文学修業は，おそらく彼が17才であった1808年頃から始まったのではないかと私は考えて居ります。たしかに，それ以前においても，例えば Bong 版のグリルパルツァ集に所載のものでは1804年5月14日に作られた≫二人の従兄弟達について≪という題の詩や，1807年の戯曲の為の断片として≫Rosamunde Clifford≪（1807年5月14日），≫Lucretia Creinwill≪（1807年）の如きものが見られますし，更に諷刺詩風のドラーマも1806年のものとして残されては居りますが，その内容・形式は年齢相応に幼いものであります。≫二人の従兄弟達について≪という詩は「二人の従兄弟は頭が悪くて情緒も乏しい，賢明なる自然はよくもまあ親戚の絆に結び合はせて，あの連中を揃いも揃って似通はせて創り出したものだ」などということを，12才の幼なさでグリルパルツァが悪口を述べているものであります。

それに対して，1808年という年はしかし，若きグリルパルツァにとって一つの実り多き収穫の年であったと申して良いと思はれます。この頃，彼の身辺には後に官中秘書官になった Wohlgemuth，その妹 Therese，妹の友人 Antoinette，後にローマ法の教授になった Johann Kaufmann，統計学の教授になった Franz

Kerschbaumer, 工科大学の教授になったAltmütter, その他 Ignaz Mailler, Ferdinand von Paumgarten など数名の有能な友人が居りまして，1808年の5月14日に ≫Gesellschaft zur gegenseitigen Bildung≪ と称する勉強会を設けて，以来，各人は自分の作って来た論文・詩歌の類いを毎週土曜日の夕方，集会の席で読み上げ，相互に批評をし合ったものでした。グリルパルツアの日記によると，彼は心理的に他の仲間に反撥を感じることもあり，必らずしも常に友人関係はしっくりと行っていたとばかりも云い切れませんでしたが，まずまずこの会は最年長の Altmütter の指導で成果を上げたのでした。Josef Nadler は1808年のこの一年間を「想像に余る実り多き年であった」と申して居りますが，確かにグリルパルツアは後に戯曲の大作を物する為の準備としての小さな作品，計画の多くをこの一年をめぐって生み出したのでありました。

そしてこのあと数年間にわたる準備期を経て，1813年および1816年の二度，グリルパルツアはスペインの劇作家 Pedro Calderon de la Barca の作品を飜訳することによって世に出ることになったのでありました。

カルデロンは1600年の1月17日，スペインの首都マドリーに生まれ，数奇な人生を送った後1681年5月25日死んだ人であります。9才で Jesuiten 学寮に入学し，13才で Salamanca 高校に入学。法律，哲学，数学を学びました。彼の敬虔な母親は彼を聖職者にしようとしましたが，彼はこの頃から詩の才能をあらわしはじめ，1620年には聖 Jsidorus の列福式に際し，公開の作詩コンテストに参加し，賞金を獲得したりして，母親の願いに従おうとはしませんでした。1625年から1635年まで，スペイン王の許で戦争に従軍し，1635年から Buen-Retiro の離宮にあった宮廷劇場の支配をし，同時に王室関係の一切の儀式，祝典の執行を委ねられました。1637年に，Santiago 教団の騎士となりましたが，生来の気強さから，この頃恋のもつれで決斗をして左のこめかみに負傷したり，彼の作品の試演に際し，喧嘩さわぎをおこして怪我をしたりなどの武勇伝を残して居ります。自伝風な Romanze にその述懐があり，それによると，彼はおそらく中世風の気骨を残した，幾分かの粗暴さをも持った騎士らしい男であったのだろうと思はれます。1651年に聖職者となり，1653年 Toledo の大司教座教会の司祭（Kaplan）の一人になり，1663年には Philipp 4世の命令でマドリーの王室霊廟の司祭，併せてマドリーの San Pedro 教団の会士になりました。その死後，遺骨はマドリーの San Salvador 寺院に150年程の間収められていましたが，1841年以来，Atschator 郊外の San Nicolas 修道院の墓地に移された……という略歴の持主で，73篇の Fronleichnahmsfestspiel（聖体祝日劇），123の Komödias（戯曲），200の Vorakt（序幕劇），100の Divertisments（娯楽劇）その他を残しました。

カルデロンをドイツに紹介したのはロマン派の人々，殊に August Wilhelm Schlegel でありまして，グリルパルツアがカルデロンの戯曲に近づいたのもシュレーゲルがその仲立ちになっておりました。シュレーゲルは1803年と1809年にカルデロンの飜訳を出し，5つの戯曲を独訳しました。ゲーテはシュレーゲルの飜訳を高く評価し，ワイマルの舞台においてカルデロンの戯曲を上演する運びをつけたのはゲーテ自身でありまして，まず1811年 ≫Der standhafte Prinz≪，1812年 ≫Das Leben ein Traum≪，1815年 ≫Die große Zenobia≪ というように次々とカルデロンの戯曲を上演いたしました。ゲーテもシラーもカルデロンには最大級の讃辞を贈って居ります。シュレーゲル兄弟のうち，兄の Wilhelm は1803年，1809年に≫Spanisches Theater≪を発表し，1808年にはウィーンにおいて有名な≫芸術および文学としてのドラマに関する講義≪を発表し，1809年から1811年にかけてこれを印刷に付して居りますが，これらの中においてカルデロンを讃嘆して居りますし，又弟の Friedrich は≫文学通史≪（Geschichte der alten und neuen Litteratur）の中において，同様にカルデロンを讃美して居ります。その他一般的風潮として，ドイツでスペイン演劇，とくにカルデロンの作品に対する関心が高まってきていたという背景のもとに，グリルパルツアの眼もまたカルデロンに向けられたものでありましょう。グリルパルツア自身，その自叙伝の中で，カルデロン飜訳当時の回想として次の如くに述べて居ります。「それこそ私の将来に対して本質的な影響を持つことになったのであった。私は以前から詩人の飜訳などやれるものではないと思っていた。私は記憶力が悪かったけれども，二つの古典語とフランス語の外に，イタリア語と英語は身につけておいた。その上，私は Bertuch のドン・キホーテ訳と彼の論文によってスペインの詩人に対する関心を唆られていた。私はごく若い頃，他言語同様，スペイン語にも手を染めていたのである。私の手には極めて古いスペイン文法書が入っていた。これが極め付きの古本であったため，Lope de Vega やカルデロンの言葉に先行していた程であった。それでのちのち私は，この本から学び取った規則をもう一度習い直さねばならない程であった。辞書はお金がなかったので買うことも出来ずに居たが，それでもどうにか古本屋で一冊の Sorbino を入手する事が出来た。この辞書にはAの項が全く欠けていたけれど，そのおかげ1でグルデンという紙代ぐらいの値で購入出来たのである。しかしこのような武器では大して物の役には立た

なかった。この頃，シュレーゲルのカルデロン訳若干が出版された。この飜訳のうち，私をとくに惹きつけたのは≫十字架にかける祈り≪(Andacht zum Kreuz)であった。この同じ人によるシェークスピアの飜訳が実に素晴らしいものであることを私は認めない訳には行かなかったが，それ丈に彼のカルデロン訳は私には欠点だらけで不満足なものに思えたのであった。心の振幅が殆んど詩そのものを凌駕しているとも云える一人の詩人カルデロンが，麻痺したような脱臼したような定まり文句の中では身動きもならなかったかも知れないと私は考へた。宮廷図書館はあらゆる助力を提供してくれた。私はスペイン語にぶつかった。そして，一番困難な道を選んで，カルデロンその人にぶつかったのである。難所を安易に通り越してしまわない為に，一語一語を辞書に当って調べる事を余儀なくさせられる為に，私は選び出した作品≫人生は夢≪を一段落解読するごとにすぐさまドイツ語の詩句に移したのである。原文のままに韻文化したのである。この辛い勉強にどれ程の時間を費したか，覚えがない。それでも第一幕の半分にも行かなかったのであった。私はただただこの飜訳においてスペイン語の勉強をのみ志ざしていたのであった。」

グリルパルツァは1809年，父に死に別れてから，母と三人の弟の扶養を余儀なくされ，その為1811年ウィーン大学で法律学を修め了えた後，一時，ある伯爵家において家庭教師などしたりしながら，1813年2月からは宮廷図書館の無給修習生になりました。この就職によってグリルパルツァは日常生活の豊かさは得られなかった代りに，自分の為の研究をする完全な自由と暇を得たのでありました。この頃，さきほどのグリルパルツァの自敍伝中からの引用にも言及されていたように，Bertuchの独訳ドン・キホーテとシュレーゲル訳のカルデロンに導かれてスペイン文学およびスペイン語に深く傾注して行ったのであります。グリルパルツァはスペイン語の基礎を一応，ごく若い頃につくっておいたと述べて居りますが，それが果して何時頃のことかは判然としません。二つの古典語というのはギリシヤ語，ラテン語の事でありますが，これはグリルパルツァが1801年から1804年までSankt Anna-Gymnasium に学んだ頃からのもので，彼が10才乃至13才までの時期にあたって居ります。その最も早い頃の記録では1803年，彼が父親 Wenzel に宛てたラテン語の手紙が残されて居ります。又1806年から1807年にかけてフランス語による詩が二つ，初期の詩集中に残されて居り，又イタリア語については1811年に Vittorio Alfieri の悲劇 ≫La congiuradei Pazzi≪ の第2幕第5場からの引用文が日記に現われて居ります。これらはいずれも各原語による記述の最も古いものではありますが，しかしそれが，各言語の習得時期と必らずしも厳密に一致するものでない事は当然であります。

グリルパルツァがスペイン語を極く若い頃から学び始めたとするその時期についても，もちろん，推測の域を脱しません。彼の蔵書に関しまして調べてみましたが，目録中，スペイン語の教科書は4種類で，目録番号は，373, 375, 376, 377 であります。しかしそれぞれ出版年代は1839年，1822年，1822～24年，1839 となっていて，彼とスペイン語との最初の接触年代とは全く無関係であります。恐らく彼の最初のスペイン語教科書，又は文法書はAの頃の欠如した古い辞書と共に散逸したものでありましよう。ただ日記に記載のある限りでは1810年8月14日と1811年7月の記事が，スペイン語のものでは最も古いものであります。この二つの記事のうち，後者はカルデロンの Devocion de la cruz 即ち前に述べられました≫十字架にかける祈り≪の第1幕からの引用文であります。1811年にはグリルパルツァがカルデロンを読みつつあったことの証左であります。又前者は Hoy me rendiò mi Tio José S. mi B.a.C と簡単に記されているのでありますが，この文は若いグリルパルツァのスペイン語研究の跡を示していると共に，彼の生涯における一つの悲しい失意の記録でもありました。「今日伯父の Josef が私に Blanka von Kastilien を返してくれた。」というこの言葉は，ここで少し傍道に入ることをお許し願いたいのでありますが，グリルパルツァが1810年に完成した最初の野心的な5幕物の大作，Blanka von Kastilien に関しているので，彼はこの作品にかなりの自信を持って居りまして，ウィーンの舞台にかけられることもあながち空しい夢とは考えていなかったようであります。ただ彼は現実において上演に関し積極的ではありませんでしたが，友人 Altmütter の勧めもあり，母方の伯父 Josef Sonnleitner が Burg 劇場の Theatersekretär をしていた関係を辿って，劇場総監督の Graf Pálffy の手許まで，作品を提出し，読んで貰っていたものが，長すぎるという理由などからグリルパルツァの許に返却されて来た次第を指しているのであります。グリルパルツァはこの作品の主人公 Blanka 役に，当時の大女優 Betty Roose を考えながら，執筆していたもので，彼女が1808年10月24日死去した日の彼の日記に，「ローゼ夫人が死んでしまった。これで私の希望も消えてしまった。Blanka はもう決して上演されない。Robert もそうなってしまった。[1] もう何が何だか判らない。悲しい。こんなに楽しく仕事をしたことは無かったのに。今ではそれが完全な重荷になってしまった。」と書き記していたものに関係を持っているのであります。

さて，このようにグリルパルツァがカルデロンの≫人

生は夢≪（La vida es Sueño）を1813年始めて飜訳するまでには多分最小限3年程のスペイン語学習の期間があった筈であります。[2)]

グリルパルツアが何故カルデロンの≫人生は夢≪を飜訳したのかという理由の穿さくも勿論，当て推量の域に止まらざるを得ませんが，その頃までに戯曲および断片的習作の量がかなり増してきて，劇作上の抜巧が相当の進歩を見せていたこと，その作品がカルデロンの多くの作品中最高の傑作とも云えるものであったこと，又前述したW・シュレーゲルの飜訳5篇中にこの作品が含まれていなかったということ，内容的にその深い哲学性とロマンティシュな色彩が彼を魅了したことなどが挙げられると思います。又もう少し根本に遡れば，そもそも若いグリルパルツアがカルデロンに非常な親近性を敏感に感じ取ったという事もあったのでありましょう。

作劇上の問題として彼とカルデロンとの親近性を考えてみますと，第一に劇を統一する理念の存在という点が挙げられると思います。カルデロンの劇においては，劇を構成する個別的情況が中心理念をめざして集中する指向性を持って居るのであります。このような意味で，グリルパルツアが当時，彼の最も尊敬していたシラーとの相似性を見出して，その故に一層カルデロンへの傾斜を深めたことはむしろ，当然の事であったことと私は考えて居ります。

グリルパルツアはシラーに反撥しつつ，彼に強く惹かれる自分を告白しない訳には行きませんでした。1810年の6月19日，彼はシラーについてこう書いています。

「私の好みは近頃変って来ている。まだ半年程前にはシラーの作品に心を奪われていたものだった。ゲーテはその反対に程度としてはもっと低い役割しか私に対して果していなかった。それが，今ではすっかり逆になってしまった。私は自分一人だけでも，あるいはよその人の所に行ってまでも，激しい調子で彼をこきおろしてやろうとするのだ。そしてその反対にゲーテが私をすっかり占領してしまっている。私の心の中の積み重ねがこの短い期間のうちに増したのであろうか。それとも——。とにかく私にはこれをどう考えて良いのか判らない」。

1810年6月23日の日記。

「シラーの作品は，それを私が思い浮べる時には，実に嫌なものに思はれてくるのに，実際にそれを読んでみると，そういう不快感がめっきり和らいでくるのは不思議である。それがゲーテの作品は読んでみると，その作品のさまざまな登場人物を心に思い浮べる時ほどすばらしくは思はれないのだ。……ひよっとすると私の空想力が悪戯をしているのかも知れない。今日オルレアンの少女のうち何箇所か読んでみて，涙が出る程感動させられた。これで，私は振り出しに戻ったようなものである。私はシラーを見誤っていたのだろうか」。

そして6月30日の日記では，

「私は近頃シラーのオルレアンの少女を読んだ。そして私は全く感動した。私は涙を押し止める事ができなかった程だ。まず私はこれまでシラーを不当に扱っていたのかと後悔した。……こかしそれにしても……」。

とあります。後にカルデロン同様，スペインの多作の劇作家 Lope de Vega を知ったグリルパルツアは彼をゲーテと対比して，その類似性を感じ取って居ります。

「シラーは上に行き，ゲーテは上から来る。」とグリルパルツアは書いたことがあります。これは1836年夏に始まって1837年の初めを超えない時期に，ノートの形でまとめて書かれた文章の中に含まれるものの一つでありまして，日記帳の一部として書かれたものには相違ないのでありますが，その意味する所は，前述したカルデロン＝＝シラー，ロペ・デ・ヴェガ＝＝ゲーテの図式を示すものであり二組の人々の作劇上の傾向を指しているものであります。

それ以前の1827年12月3日に，グリルパルツアはHohenthal 伯爵に手紙を書き送って，「私は今ロペ・デ・ヴェガの作品に読み耽って居ります。この人はその全体から判断をしなければならない風の人であります。しかしそうしたら彼は本当に神様のようになります。彼はスペインのゲーテです。カルデロンがスペインのシラーであるように。」と述べて居ります。時期をさかのぼってみれば，1820年11月の日記ですでにグリルパルツアは彼の図式を樹てていたのであります。シラーとカルデロンに共通のものは前にもお話しました通り，その哲学性であり，劇に存在する理念であり，理念に向う集約的な劇構成であります。その劇中に現はれる人物は現在彼らが立ち現はれている姿を超越して，一つの精神的な世界を明らかにする人間像をとるようになります。それに対し，グリルパルツアはゲーテ＝ロペの劇を哲学的理念からの劇の演繹ではなく，哲学的理念への帰納であるという見方をしているようであります。理念はゲーテおよびロペにおいては，表現すべく在るのではなく，戯曲全体の挾雑物のうちから表現されてくるような種類のものでありました。

1826年11月の日記で，グリルパルツアはシラーとカルデロンは哲学的な作家であらように見える。ゲーテもロペ・デ・ヴェガも然りである。前の二人は哲学的な論議によってそうであり，後の二人はその結果を利用するからそうであるように思はれる」と書いております。

たとえば，哲学的論議の結果を利用するという事は，

グリルパルツアをして云はしめるなら，戯曲そのものが形式的に醇化されもせず，精製されもしない形で表現されているという事のように考えてもよいかと思います。ロペにおいては「感情や情熱の表現は常に本然の姿のままであるように見られる」のであります。

グリルパルツアのこのようなシラー，カルデロンへの傾斜はもちろん1810年代から明らかでありました。Blanka von Kastilien はシラーの Don Carlos の世界を明らかに下敷きにしていましたし，1816年の Ahnfrau 執筆に際して，彼の眼前に漂よい揺れていたのはカルデロンの姿，そして≫Andacht zum Kreuz≪（十字架にかける祈り）でありました。そしてこのようなグリルパルツアのカルデロンに対する傾倒ぶりは Reinhold Backmann によると「それはおおよそ1812年からまるまる 10 年にも及んでいる」のでありまして，[3] もし，仮りにその時期を頭に止めておく程度に認めるとしても，グリルパルツアがカルデロンの飜訳断片≫La vida es sueño≪のⅠを書いた1813年，そのⅡを書いた1816年は充分彼がカルデロンに心酔していた時期にあった事は確かであったのであります。

グリルパルツアのカルデロン飜訳は2回行なはれ，第2回目のものは第1回の飜訳の加筆修正でありました。カルデロンの≫La vida es sueño≪（人生は夢）は二種類ありまして，comedias と称する世俗風な悲・喜劇に一つと，Autos sacramentales と称する聖体祝日劇に一つ含まれて居ります。前者はポーランド王 Basilius は星のお告げで息子 Sigismundo が将来暴君になり，国民を圧政下に苦しめる事になると知らされ，生まれ落ちるとすぐ岩山の塔に幽閉するのでありますが，彼は長ずるに及んで鳥の共和国，野獣の王国に政治の概念を習い覚え，星々の合唱の静かな流れにその運行を計る技を会得するのであります。しかし王位の継承問題が起り，国王 Basilius は Sigismundo を試めしてみようと心を決めます。王は腹心の Clothald に命じて，Sigismundo に効めの穏やかな毒薬を飲ませ，寝ている息子を牢獄から王宮に移すのであります。つまり王位に就いた Sigismundo は夢の中にあると同じように現実と夢の区別を悟らないでありますが，次第に予言が当って Sigismundo は暴君に化して来ます。その為，国王は息子が君主たる器でないことを知って，再び眠り薬を与へて寝入った Sigismundo をもとの牢獄に送り帰してしまうというのが大筋であります。

この話が聖体祝日劇の方においては，王子 Sigismundo の代りに「人間」が現われます。彼は神の全能によって洞穴を出て光の当る所に連れ出され，天下の四大の支配者にされます。森羅万象は「人間」が善良で公正である間は彼に奉仕をするのですが，「人間」はやがて悪魔や罪過に唆のかされて権力を濫用し，分別を投げ捨ててしまい，ついには罪悪の林檎を喰べてしまいます。「人間」は以前の場所に連れ戻され，彼の幸せも夢の如く消えてしまうという筋に書き換えられ，宗教味が濃くなっているのであります。

グリルパルツアの飜訳は世俗劇について行はれたもので，初稿で僅かに181行，第2稿で175行にしか過ぎません。≫人生は夢≪の第1幕は1017行から成っていますから，その6分の1程にしか当たりません。しかしこの僅かな飜訳が，劇詩人としてのグリルパルツアの門出になったことを考えると，非常に重要な役割りを果した大きな作品であったと申せます。

1816年，彼はその181行の初稿に実に300箇所以上の修正と45行にのぼる文章の書き変えを加えました。そして個有名詞の不統一を訂正し，読むに耐える形にして世に送ったのでありました。ただ新旧二つの比較をした時，私が驚きましたのは，初稿においてその飜訳は殆んど完成に近い形であったことであり，まして初稿の最後の16行を第2稿では抹消し，第2稿に新らたに飜訳洩れの10行をつけ加えて，結局全体として181行から175行へと6行を減じた丈で，本当に文章そのものを変えたのは「ト書」を含めてでも19行でしかないのでありました。最も大きな相違の一つは各詩行の頭文字を大文字に統一したことでした。又コンマーターの挿入，省略符の挿入などは合計して95箇所にも及んでいるのに，抹消は合計3箇所，単一語の交換は59箇所でありますが，抹消はたったの2箇所しかなく，彼の初稿は言語の配置選択に関しては，殆んど完成していたのであります。しかし印刷に回された時の視覚的を訴え方において，平板で感激性のなかった初稿に，第2稿で多くの記号を加えることにより，文章，詩句を短絡にし，その全体に律動的な流動感を興えるように工夫して居ります。本来長い独白もこの工夫によって冗漫さを払拭し，引き締った感情の動きを加え，緊張感を詩句の間から洩らさぬことにおいて成功して居ります。このような詩句における眼ざましい成功は，たとえばその前の完成作で，一度は彼が舞台にかけられることを願望しさえした Blanka von Kastilien においても見られぬ所であります。Blanka においては，なるほどグリルパルツアは当時のオーストリーにおいては著名な作家でさえも免がれ得なかったという方言臭さから脱していますけれど，なおその詩句全体の口語調——つまり，日常の平凡な言語の羅列という域から脱し切れず，Blanka 全体の5125行という長い行数を，緊張は保たれ得ぬ憾みがあります。

この様な推敲を重ねた第2稿は1816年6月5日号の

≫Wiener Modezeitung≪ に掲載されました。この前日，計らずも Schreyvogel のカルデロン飜訳劇≫人生は夢≪が Theater an der Wien において上演された為，グリルパルツァの飜訳には，「昨日 Theater an der Wien おいて上演された飜訳劇とは全く異なったものである」という但し書が付けられて居りました。

この原稿を出版に回したのはグリルパルツァの友人，Deinhardstein でありました。1816年から1818年にかけて Modezeitung の編集長をしていた人は，Wilhelm Hebenstreit という人でありましたが，この人を「頭の良い悪魔」などと呼ぶ人が居た程で，相当に頭の切れる敏腕な編集者であったと思はれますが，この人は Schreyvogeel に対して余り良い心証を抱いていなかったようで，1816年の6月8日の Modezeitung の土曜日版で Schreyvogel の飜訳劇を攻撃したのでありました。この間のいきさつは1842年の10月30日，グリルパルツァ自身が Foglar という人に語っている所によりますと，次の如くであります。

「Deinhardstein が，こっそりと私の原稿を印刷に回してくれた。それが驚いたことに Schreyvogl の飜訳した劇が上演された翌日，新聞に掲載され，しかも Schreyvogel の飜訳を攻撃する武器として利用され，度をこした賞讃が與えられていた。しかしこれは私にとって不愉快であった。なぜなら私の方には Schreyvogel と事を構える意図は全く無かったからである。Schreyvogl は私に訪ねて来てくれと申し入れて来て，今回の事件で心を傷つけられているのだという旨を伝えて来た。私は彼を訪問し，この件について自分は全く与り知らぬ事であると説明し，彼もそれを諒承してくれた。Schreyvogel は私の飜訳を賞め，今後文筆を盛んに執るよう勧めてくれた」。

Schreyvogel がグリルパルツァに語った事は単なる言葉丈の飾りではなく，実際に彼は1816年6月14日，「例の飜訳で，私のライバルはあの若いグリルパルツァである。あの若さですばらしい才能だ」。と日記にしたためて居るのであります。

グリルパルツァの作品で印刷されたものには，この飜訳の前に，≫Die Musik≪という詩がありまして，これは Wiener Journal に発表されましたが，作者グリルパルツァの名が付けられていなかった為，カルデロンの「人生は夢」飜訳断片こそ，彼が自分の名前で世に問うた第1作になったのでありました。Schreyvogel との一時的な阻誤，行きちがいはそれが解決した後は，かえって両者を結ぶ強い友情になり，Schreyvogel の勧めと忠告によってやがてグリルパルツァは本格的な Dramatiker としての第1作，“Ahnfrau” を世に送ることになります。

カルデロンの飜訳はもとより小さな断片稿にすぎぬものであり，グリルパルツァ自身の述べているように，単に語学の勉強のための習作にすぎなかったのかも知れませんが，後世の大詩人を生み出す機縁になった点で，くり返し申し上げるようですが，大きな意義を持つ作品になったのでありました。

本日，詩人の死後百年の記念の為に，若い日の詩人の文学的出発について，小さな研究を述べる機会を与えて下さったことに対し，最後に深く感謝いたします。

注

1）Robert, Herzog von der Normandie
1808年のグリルパルツァの作品，第3幕まで書かれた散文劇であるが未完のままに終ってしまっている。

2）Wien の Anton Schroll 社の Franz Grillparzer 全集のうち Jugendwerke 4. Teil に掲載されている W. Wurzbach による註によれば（Anm. S. 530～531），グリルパルツァがスペイン文学の洗礼を受けたのはごく早い時期からであって，彼の伯父の J. E. Sonnleithner がその手引きをしたものとしている。Blanka von Kastilien もその素材はスペインのものであることに言及している。Blanka は1806年から1810年にかけて完成しているから，もしグリルパルツァがスペイン語の純粋に語学的入門に引きつづいてスペイン文学に入って行ったとの仮説を立て得るものとすれば，彼のスペイン語学習期は1806年以前にまでさかのぼり得るのである。なお1813年にカルデロンの飜訳がなされたことの推定の根拠として，前記 Wurzbach は，用いられている用紙から，又，第1稿が頭文字が大小とりまぜてあることなどの点を挙げている。押韻した戯曲では頭文字が各行大小とりまぜて書かれているのは1813年代の “Das Leben ist ein Traum” が最後のもののようで，1814年代に Gozzi 劇の飜訳で Der Raabe があるが，これは押韻部分と散文形部分の混合である。1814年から1815年にかけて書かれた Drahomira の II 稿ではこの点で統一がなされている。この作品も第1稿（1812年末）では頭文字の大小不揃いの点があり “Das Leben ist ein Traum” と軌を一にしている。

3）Reinhold Backmann: Spanische Studien (1937), Walter Naumann: Grillparzer. (Urban Bücher) Verlag Kohlhammer. S. 129.